

宮本みち子著「若者が《社会的弱者》に転落する」洋泉社新書 2002年11月21日刊を読む

ポスト青年期を考える

1. 既成の大人の世界に入ることを躊躇する若者が増えている。仕事がなく大人の世界に入っていけない若者も増えている。大人になる前段階、青年期と成人期の間に「ポスト青年期」と称される新しいライフステージが出現した。
2. ポスト青年期は先進国に共通して見られる現象であるが、いま日本では、成人期へと移行をしていくこのプロセスに、異変が起こっていることによりやく気づき始めたところである。若者たちが、これまでの世代がたどったような行程を踏まなくなったのである。成人期にいたる新たな行程が見つかるのならばいい。だが、多くの若者がつまずいて、そのまま生活基盤をもてないリスクな混沌とした世界をさまよっているようにみえる。
3. 1990年代の初めにはポスト青年期は、豊かなモラトリアム期を謳歌する「贅沢な若者たち」のことであった。だが90年代後半には、深刻な経済不況と就職難に直面して、学校から仕事へとスムーズな移行ができなくなった「不安定な若者たち」の層が増大した。成人後も親への依存が果てしなく続き、晩婚化・非婚化も急ピッチで進み、出生率の著しい低下が進行している。20代、さらには30代すらも、いわゆる「一人前」に向かって前進する時期とは必ずしもいえなくなった。
4. 欧米先進国では、成人期への移行に異変が生じていることに対する認識は日本よりずっと早く、1980年代に現れた。若年層の失業問題、ホームレスの発生、貧困化と犯罪増加、未婚の母問題、同棲の一般化などが社会現象となったため、若者に対する関心が高まり、研究者、政策当局、実務家たちの間で、ポスト青年期の研究や社会的な検討が進んだのである。だが、日本では社会経済環境の変化が遅かったために若者に対する社会の関心は一貫して薄かった。とくに若者が重大な困難に直面しているという認識はほとんどなかったといっても過言ではない。
5. 「パラサイト・シングル」論は、若者世代に対して内心苦々しい思いを抱いていた大人たちに火をつけた。経済停滞や少子化など不安要因の“元凶”として、「豊かな時代に成長して、いつまでも親に寄生する自立しない若者」をバッシングする風潮が広がった。
6. 若者の就職難が顕在化・長期化し、にわかに社会的関心となったが、ここにも日本の特徴がみられる。就職難や失業という雇用および経済問題よりも、年々増加を続けるフリーター現象への関心の方が高いのである。この現象が「大人になりたがらない若者」の象徴として、パラサイト・シングル現象とどこか重なる点に世間の関心は集まるのであろう。しかし、これらの

議論は断片的で、若者を一面的にとらえる傾向が強く、問題の本質を踏まえたものにはなっていない。若者層の失業に関しては、景気が回復すれば解決するだろうという甘い期待がいまだに少なからずある。

7 .このような認識こそが重大な問題を孕んでいることを明らかにしたい。ポスト青年期現象は、社会経済変動によってもたらされた結果であり、教育、雇用、家族、価値観の根本からの見直しが必要な社会構造的な問題である。「彼ら」の問題ではなく、われわれの問題なのである。そして、状況はもはや猶予を許さず、現実的な手をうつべき段階にきている。

8 . 先進工業国における共通性と日本社会の独自性の両面から、若者の社会的地位がいま、歴史的転換点に直面していることを示したいと思う。

9 . いま日本の若者たちは崖っぷちに立っている。この社会の敗者の地位に追い込まれようとしているのだ。

P.3 ~ 5

[コメント]

ヨーロッパではあたり前のように行われているが、日本では全く手つかずの包括的的青年期政策の日本での策定の基本文献の一つと考える。

- 2009年5月24日林明夫記 -